

筑田周一作

# ピアノ

女子聖学院中学校演劇部

登場人物

保坂鞠子 女子聖学院英語科教師

川本綾子 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班班長、のち昼組

霜山美沙子 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班、のち昼組

曾野和歌子 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班、のち夜組

北野美緒子 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班、のち夜組

増田良枝 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班、のち昼組

白井路津子るっこ 女子聖学院三年 王子兵器工場勤労働員 川本班、のち夜組

佐藤力三 王子兵器工場工員 川本班指導係

幕開き。歌声が聞こえてくる。

かぐわしき花の香り 園に満ちて

爽やかなる青葉の色 岡にあふる

みどりなす風にそよぐ 桜よ楓よ銀杏よ

うるわし我らの学び舎 幸あれ 女子聖学院

五人の女学生が思い思いのポーズで歌っている。川本綾子にスポット。川本は歌が始まると話し始める。

川本綾子

拝啓

大澤寿人様

初めてお便りします。お元気でお過ごしですか？

大澤さんのことを学校で先生から教えていただきました。あの伝統あるボストン交響楽団を日本人で初めて指揮したんだよって。それから、大澤さんは私の憧れになりました。

そんな素晴らしい方が、私たちの校歌を作曲したんだと、街角に立って大いに宣伝したい気分です。

勤労働員きんろうどういんでも、休憩時間きゅうけいじかんにはみんなで校歌を歌っています。今は学校に行けないけれど、我慢です。大澤さんの作って下さった歌を歌って、元気をいただいています。

私もいつか、大澤さんのような作曲ができるようになりたい。それが今の私の夢です。

それでは、またお手紙書きます。

さようなら。

昭和十九年九月十日

川本綾子	川本綾子
追伸 寿人さんとお呼びしてもいいですか。	
佐藤カヨ、足を引きずりながら、ゆっくり登場する。	
休憩終了！	
(深呼吸をする) よし。(みんなの前に進み出ると、くるりと舞台に背を向ける) 整列！	
パツと横に一列に並ぶ五人。	
川本班、総員六名、欠席0名、番号1ー1！	
2！	
3！	
4！	
5！	
6！	
以上報告終わり！	
作業始め！	
照明変わる。軽快な音楽 (The Factory Machine)。女学生たち、立ったまま旋盤 <small>せんぱん</small> に向かって作業をしているマ	
イム。削る作業、受け取り、検査する者、箱詰めする者。数えて記録する者。佐藤は生徒たちの様子を監視して	
いる。	
作業終了！ (照明変わる)	
みんな、やれやれというポーズ。	
佐藤カヨ	佐藤カヨ

佐藤カヨ	不良品は？
増田良枝	(帳面を見るマイム) 一本です。
佐藤カヨ	誰だい、おしゃかをだしたのは？
川本綾子	すいません！
佐藤カヨ	作業終了は取り消し。作業続行！
六人	え！？
佐藤カヨ	曾野和歌子、何か言おうとするが、白井に止められる。 復唱！ <small>ふくしょう</small>
川本綾子	作業終了は取り消し。作業続行！
五人	はい！
佐藤カヨ	作業開始！
佐藤カヨ	照明変わる。軽快な音楽 (The Factory Machine)。女学生たち、立ったまま旋盤に向かって作業をしているマイム。削る作業、受け取り、検査する者、箱詰めする者。数えて記録する者。しかし、川本、さっきより明らかに疲れていて、動きがズれる。
佐藤カヨ	やめ！
佐藤カヨ	照明変わる。
佐藤カヨ	おしゃかは？
増田良枝	……3本です。
川本綾子	すいません！

佐藤力ヨ	やり直し。
曾野和歌子	待って下さい。
佐藤力ヨ	あん？
曾野和歌子	やり直す前に、少し休憩時間をいただけませんか。
佐藤力ヨ	必要なし。
曾野和歌子	父の工場でも、昼夜交代で働いています。でも、休憩時間はちゃんと取って、集中力が切れないようにしています。
佐藤力ヨ	昼までしか働かないのにな？
曾野和歌子	お願いします。五分で結構ですから。
佐藤力ヨ	(大げさに驚く) 五分も！
曾野和歌子	お願いします！
佐藤力ヨ	ああ、時間ももったいない。さっさと始め！
曾野和歌子	曾野和歌子、なおも食い下がろうとするが、他の生徒たちが止める。
川本綾子	和歌子さん、ありがとう。もう大丈夫。
霜山美沙子	綾ちゃん、無理しないで。
川本綾子	みんな、ごめんなさい。今度こそ、ちゃんとやります。佐藤さん、失礼しました。
佐藤力ヨ	作業開始！
佐藤力ヨ	照明変わる。軽快な音楽 (The Factory Machine)。女学生たち、立ったまま旋盤に向かって作業をしているマ イム。削る作業、受け取り、検査する者、箱詰めする者。数えて記録する者。 作業終了！

曾野和歌子	不良品は？
増田	ありません！
6人	ヤッター！（川本を囲んで、喜び合う女学生たち）
保坂鞠子	保坂鞠子、しばらく前に下手に立ち、このやり取りを見ていたが、静かに歩み寄る。
6人	皆さん。
佐藤カヨ	先生！
保坂鞠子	（ちよつとうるたえて）あら、先生。
佐藤カヨ	こんにちは、佐藤さん。
保坂鞠子	お迎えですか？
佐藤カヨ	他の班が授業に参りましたのに、川本班だけ来ないので、様子を見に。熱心なご指導ありがとうございます。
保坂鞠子	嫌みですか。
佐藤カヨ	いえ、佐藤さんのおかげで、生徒たちの技量も日に日に上がっております。今も、佐々木工場長にお礼を申し上げて来た所です。ありがとうございます。（深々と礼をする）
佐藤カヨ	工場長に？（工場長の名前を出され、露骨にへつらう態度に変わる）いや、私も教えががありますよ。筋がい
保坂鞠子	いから。
保坂鞠子	ご指導、ありがとうございました！（最敬礼する）
6人	ありがとうございました！（最敬礼する）
佐藤カヨ	仕方なく、立ち去る佐藤。足を引きずり、ゆっくり去ってゆく。最敬礼したまま、見送る7人。
保坂鞠子	耶蘇教が。（退場）

ハッと顔を上げる白井路津子。しかし、保坂鞠子は顔を上げない。恐る恐る顔を上げる曾野和歌子。その気配に他の生徒も顔を上げる。川本綾子と保坂鞠子だけがまだ、最敬礼のまま。

先生……？

行った？

(舞台袖まで行って背伸びをして確かめる) はい。

(顔を上げる) ふう。 (生徒たちの方を見る。まだ最敬礼したままの川本綾子に歩み寄り、やさしく手をかける。) よく、我慢しました。

(直立不動の姿勢に変わる) 私のせいです。申し訳ありません！ (最敬礼する)

先生、私見たんです。綾ちゃんだけ、削れない道具を渡されたの。

旋盤だって、旧式のオンボロばかりです。こんなの、正確に削れというのがどうかしています。

その中でも、調子の悪いのをわざと綾子さんに使わせて！

佐藤って女工メカ、ひどすぎます！

増田さん、目上の人を呼び捨てにするのは、失礼ですよ。

でも、私、悔しい……。 (保坂鞠子にすがりついて泣く)

みんな、ごめんね。

川本さんのせいじゃないよ。

初日に倒れて、佐藤さんを怒らせたから。

他にも何人もいたんだよ。綾ちゃんだけ目の敵にされるなんて、おかしいよ。

私たちだけじゃなく、うちの学校を目の敵にしているって聞いたよ。

曾野和歌子  
保坂鞠子  
増田良枝  
保坂鞠子  
川本綾子  
霜山美沙子  
北野美緒子  
曾野和歌子  
北野美緒子  
増田良枝  
保坂鞠子  
増田良枝  
保坂鞠子  
川本綾子  
白井路津子  
川本綾子  
霜山美沙子  
北野美緒子

曾野和歌子	(北野に) 本当？ (保坂に) 先生！
保坂鞠子	うわさ話など、真に受けてはなりません。
北野美緒子	でも、隣の組の田中さんがそう言っているのを聞いたって。
曾野和歌子	さっきも耶蘇教って捨て台詞を。
白井路津子	ミッションスクールだからですか？
保坂鞠子	そういうことはすべて噂に過ぎません。
曾野和歌子	だからって、どうしてあんな奴にへつらうんですか！？
保坂鞠子	佐藤さん、でしょう。いいえ、へつらってなどいませんよ。いいですか、皆さん。今は国民一丸となってこの難局を乗り越える時です。お手伝いをさせていただいている私たちが、工員の皆さんからすれば、お荷物と感じられても、それは仕方ありません。機械が旧式なもの、持っているもの全てを出し尽くして増産に励む必要があるからです。私たちはただ、精一杯努力して、お国のために尽くすこと。そうすれば、きっと誤解を解くことができます。
5人	はい。
保坂鞠子	白井だけ返事をしない。
保坂鞠子	さ、授業です。行きましょう。
霜山美沙子	みんな、保坂鞠子に促されて下手へ歩き出す。白井だけじっと動かない。
白井路津子	路津子さん？
保坂鞠子	お国のために尽くして誤解を解くなら、授業なんか受けている場合じゃないと思います。今日はもう十分働きました。

白井路津子

いいえ！工場の人たちはそうは思っていないせん。

保坂鞠子

工場長さんも、女子聖学院の皆さんはよく力になっているとおっしゃってましたよ。

白井路津子

よその学校は、一日働いています。私たちだけ、半日交代で、授業まで受けてたら、いつまでたっても勝てません。

保坂鞠子

これは競争ではありません。

白井路津子

いいえ、競争ですよ！よそだってうちには絶対負けるなって言ってるって、私聞きました。

保坂鞠子

よそはよそ、うちはうちです。

白井路津子

(じれったそうに) みんな！女子聖のこと悪く言われて悔しくないの？

北野美緒子

そうだ、そうだよ、授業より、今は働かなくちゃ！

白井路津子

見返してやるう！

北野美緒子

うん！

曾野和歌子

鼻を明かしてやるう！

北野美緒子

ええ！

白井路津子

三人、保坂鞠子に近寄る。

白井路津子

先生、私たちを午後の班に組み入れて下さい。

保坂鞠子

それはできません。

北野美緒子

どうしてですか！

保坂鞠子

午後は午後の班の人たちの勤めがあります。

曾野和歌子

人数がいた方が仕事をしやすいと思います。

保坂鞠子

授業を待っている他の人たちのことを考えなさい。

白井路津子

一死奉公いっしほうこうのために、学業を捨てる覚悟はできています。

曾野和歌子

私は体力に自信があります。まだまだ働けます。

北野美緒子

そうです。学校の待避所たいひじょづくりの時も、疎開建物そかいたてものの材木を毎日運んでたんですから。

保坂鞠子

その心意気はよしとしましょう。

北野美緒子

では、組み入れていただけますね。

保坂鞠子

その前に、逆に聞きますが、北野さん、あなたは私の授業をそんなに受けたくないのですか。

北野美緒子

そんなことはありません。先生の授業は大好きです。

保坂鞠子

曾野さん、あなたはどうですか？

曾野和歌子

私も、先生の授業は大好きです。

保坂鞠子

白井さん、あなたは？

白井路津子

そういう聞き方、ずるいと思います。

保坂鞠子

あなたたちは私の生徒です。女工ではありません。女子聖学院の三年生です。

北野美緒子

(感激して) やっぱり、授業受けます。

曾野和歌子

あ、裏切り者！

川本綾子

ごめんなさい。私がおしゃかを出してしまったから。

曾野和歌子

班長のせいじゃないよ……。

曾野和歌子

間。  
わかった。授業に行こう。ね、白井さん。

白井路津子

そうね。川本さん……。責めているように聞こえたなら、ごめんなさい。

川本綾子

そんなこと。

白井路津子

でも、これは名誉の問題なの。牧師の娘の私の。

川本綾子

路津子さん？

保坂鞠子

さあ、随分、時間を取ってしまいましたね。ごめんなさい。他の班の人たちも待っています。

川本綾子

整列！

二列縦隊になる生徒たち。

川本綾子

前へ、進め！

更新する生徒たち。授業の場所に来る。

川本綾子

全体、止まれ！

保坂鞠子、授業を始める、授業に聞き入る面々。照明変わる。

2

……寿人さん。本当にいいのでしょうか。増田さんは看護婦になる夢があるし、霜山さんも音楽学校に行きたい。私も音楽の勉強がしたいという夢があります。でも、曾野さん、北野さん、白井さんはそんなことしているご時世じゃないって言います。「決死敢闘<sup>けつしかんとう</sup>」って。

授業が終わる。起立して礼をする女学生たち。保坂鞠子と北野美緒子が退場。佐藤カヨが足を引かずりながら、ゆっくり入ってくる。（照明変わる）

川本綾子

整列！川本班、総員六名、欠席一名、番号！ー！

霜山美沙子	2!
曾野和歌子	3!
増田良枝	4!
白井路津子	5!
川本綾子	以上報告終わり!
佐藤カヨ	北野さんは?
川本綾子	はい、ご家庭の事情で欠席です。
増田良枝	家庭の事情って?
曾野和歌子	馬鹿!
増田良枝	え、何よ?
霜山美沙子	……美緒子さんのお父さん、戦死したんだよ。
佐藤カヨ	いつ?
川本綾子	七月だそうです。
増田良枝	(指を折って) 四ヶ月も前?
曾野和歌子	サイパン島で。
増田良枝	……そうだったんだ。ねえ、いつわかったの?
川本綾子	八月に入った頃かな。
増田良枝	……みんなはいつ知ったの?
白井路津子	割と最近かな。ねえ。

三人	うん。
増田良枝	そっか。(落ち込む)
曾野和歌子	あんたに泣かれたら、 <small>きじょう</small> 気丈に振る舞ってる美緒子さんに気の毒だと思ってさ。
三人	ごめんなさい。
増田良枝	(涙ぐむ)
佐藤カヨ	作業開始!
佐藤カヨ	と、空襲警報が鳴り響く。
佐藤カヨ	空襲!空襲!
ラジオ	佐藤、慌 <small>あわ</small> てて転ぶ。ストップモーション。 十一月一日午後一時二八分警戒警報発令 同一時三二分空襲警報発令。同二時五〇分空襲警報解除。同四時三十分警戒警報解除。
川本綾子	この日初めて東京に、B29による空襲が行われました。しかし爆弾の投下はなく、私たちは午後の作業を中止して帰宅しました。(退場)
六人	3 6人、制服に黄色いネクタイ。生徒たちは讚美歌を歌っている。 主よ、終わりまで 仕えまつらん／御側 <small>みそば</small> 離れず おらせ給え／世の戦いは激しくとも／御旗 <small>みはた</small> のもとに おらせ給え／アーメン
川本綾子	十一月三日の明治節は各工場とも休みのため、一年生から五年生まで全ての学年が登校し、創立祝賀会 <small>そつりつしゅくがかい</small> に参加す

ることができました。作業服を脱ぎ、久々に着る制服は、なんだかとても新鮮に感じられました。讚美歌を歌い、寿人さんが作曲した校歌を五百名も集まって歌うことができたんです。式典の最後には、戦没者の追悼ついでんをする時間まひらがもたれました。そして……。

今年の昇天者しょうてんしやてんじ点呼、去年よりうんと増えたね。

肉親を亡くされた方が、こんなに多いなんて。

日本中でどのくらいになるのかな？

美沙ちゃんたち（目配せをする）

あ……。ごめんなさい。

大丈夫だよ。お父様からは、軍人の子らしく、覚悟はしていなさいって言われてたから。

美緒ちゃん……（涙ぐむ）

私たちに出来ることは、早くお嫁さんになることだね。

ええ、和歌子ちゃん、お嫁さんになるつもりなの？

卒業したらすぐに結婚して、よい子をたくさん産み、丈夫に育てて、お国のために捧げます。

同意するようにならず北野。

卒業なんて、まだ考えられないな！

今度、制度が変わったから、私たち来年度で卒業だよ。

ええ！

良枝ちゃん、知らなかったの？

うん。……じゃあ、今の四年生の人たちは、どうなるの？

霜山美沙子

増田良枝

霜山美沙子

曾野和歌子

霜山美沙子

北野美緒子

増田良枝

曾野和歌子

増田良枝

曾野和歌子

増田良枝

曾野和歌子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

北野美緒子

来年の三月、五年生の皆さんと一緒に卒業よ。

増田良枝

ということは、来年は私たちが最上級生？

川本綾子

そう。

増田良枝

そんなの無理だよ。卒業なんて、結婚なんて、準備できてない。

川本綾子

落ち着いて。まだ一年以上あるよ。

北野美緒子

良枝ちゃんは従軍看護婦になるんじゃないの？

増田良枝

そうだ！私、看護婦になります。

霜山美沙子

泣き虫に看護婦は勤まらないよ。

増田良枝

私、包帯巻くの得意なんだよ。

北野美緒子

お父様のお手伝いとかするの？

増田良枝

う、うん。

霜山美沙子

怪しいなあ。

増田良枝

……これからは、ちゃんとします。

霜山美沙子

従軍看護婦は血を見るんだよ。手が油まみれになっただけで涙目になってる良枝ちゃんにできるかなあ。

増田良枝

できるよ。卒業するころにはもっと成長してるし。

霜山美沙子

どうかなあ。「卒業なんて、準備できてない」って泣いてるよぎっと。

増田良枝

もう……。美緒ちゃん！

北野美緒子

良枝、美緒子に泣きつく。

北野美緒子

美沙子さん、良枝ちゃんをそんなにいじめないでちょうだい。

霜山美沙子

はい。

保坂鞠子

随分にぎやかね。

全員

保坂先生。

保坂鞠子

みんな、お帰りなさい。

増田良枝

ただいま帰りました！……なんだかこそばゆいね。

保坂鞠子

(一人一人の制服姿をじっくりと見て) こうして見ると、大人びたわね。

増田良枝

そうですか！(霜山に) どう！

保坂鞠子

一回り大きくなった感じがしますよ。

増田良枝

そうですか？立ったままの仕事で、お腹ペコペコで……。やつれてませんか？

霜山美沙子

人間的に大きくなったということだよ。

保坂鞠子

勤労働員で鍛えられたのね。

増田良枝

それはもう。

保坂鞠子

さあ、この後は講堂で四年生の有志が人形劇を見せてくれるそうですよ。

川本綾子

え？(霜山美沙子と顔を見合わせる)

保坂鞠子

どうしました？

霜山美沙子

あの、講堂のピアノを弾かせていただくことは可能でしょうか。

保坂鞠子

少なくとも、今日は無理ね。ごめんなさい。

川本綾子

そうですか……。

保坂鞠子

私は先に行っていますね。

白井路津子

はい。

川本綾子

(保坂を見送って) 美沙ちゃん、どうしよう。

霜山美沙子

そうだね……。

北野美緒子

どうしたの？

霜山美沙子

久しぶりにピアノを弾こうって、楽しみにしてたの。

増田良枝

美沙ちゃんち、ピアノあったでしょう？

霜山美沙子

もう疎開そかいさせてしまったんだ。

増田良枝

どこに？

霜山美沙子

母の実家のある甲府に。

増田良枝

ええ、じゃあ、美沙ちゃんも疎開するの？

霜山美沙子

まだ、決まってるはないけど、いずれ。

増田良枝

そう……。

霜山美沙子

去年の音楽会、綾ちゃんと私と、連弾したでしょう。

増田良枝

上手だったねえ。

川本綾子

一緒にいる間にもう一度弾こうって。グランドピアノなんて、なかなか弾く機会ないし。

曾野和歌子

だったらうちおいだよ。

川本綾子

和歌子さんち、ピアノあるの？

曾野和歌子

下町の工場にそんなハイカラなものがあるわけじゃないでしょう。

霜山美沙子

どういうこと？

曾野和歌子

近所の小学校にあるんだ。ピアノ。

川本綾子

小学校に？

曾野和歌子

あたしが卒業した小学校だから、先生たちは顔見知りだし。頼めば弾かせてくれるよ。

霜山美沙子

綾ちゃん！

川本綾子

美沙ちゃん！

曾野和歌子

よし、今日の帰りにうちへおいで。

増田良枝

私も！

白井路津子

私も！

曾野和歌子

じゃあ、みんなで行こう。

北野美緒子

私は、ちょっと。ごめんなさい。

白井路津子

何か事情があるの？

北野美緒子

兄から、写真を送ってくれて手紙が来たの。

増田良枝

お兄さんから？

霜山美沙子

美緒子さんのお兄さん、海軍よね？

北野美緒子

うん。今、呉くにいるの。

増田良枝

くれ？

北野美緒子

広島の軍港よ。今度、戦地に向かうんだって。

増田良枝

戦地へ……。

北野美緒子

その前に私の写真が欲しいって。だから今日は写真館に行って、写真を撮ろうと思っていたの。

白井路津子

そう……。

北野美緒子

手紙には銃後の守りは、私がしっかり母と支えますって書くつもり。

川本綾子

ねえ、美緒子さん、私たちも一緒に行っていいいかしら？

北野美緒子

え、でも……。

川本綾子

お兄さんに、美緒子さんには私たちがついていきますって。

北野美緒子

(喜びの色が顔に浮かぶ。が、気遣う色を見せ) いいの？

川本綾子

ええ。(霜山に) ね？

霜山美沙子

そうね。行こう。

白井路津子

そうだね。

増田良枝

……私の制服、お父さんのコートを仕立て直したから、ちょっとごわごわしてるんだ。

霜山美沙子

そんなの写真には写らないって。

増田良枝

そう？

霜山美沙子

嫌なら置いてくよ。

増田良枝

あ、待ってよ。

霜山美沙子

泣きべそかかないでよ。

増田良枝

かかないよお。

川本綾子

みんなで写真館へ。

川本綾子

微笑みながらポーズを取る6人。ストロボの音。ストップモーション。

川本綾子

工場での授業はいつの間にかなくなりました。十二月十八日には夜勤制が始まりました。体力のある和歌子さん、

路津子さん、美緒子さんは夜組、美沙子さん、良枝ちゃん、私は昼組に分けられました。ですから、これが、6人で集まる最後の機会となりました。

4

クリスマス。みんなが「聖しこの夜」を歌っている。

聖しこの夜／星は光／救いの御子は／御母の胸に／眠りたもう／夢やすく／アーメン

曾野和歌子、北野美緒子、白井路津子、霜山美沙子は退場。川本綾子と増田良枝、何かを覗いて歩く様子。

良枝ちゃん、どこまで行くの？

銀座なら、贈り物になるものがきつとある。

本当に？

多分。

やっぱり、手作りのものにする。

何言ってるのよ。親友が疎開するから、記念になるものを渡したいっていったのは綾子さんでしょう。

美沙ちゃんはお嬢様だから、かえって銀座のお店なんかで買っと安物だってバレちゃう。

そこはこの増田良枝に任せなさいって。安くても質のいいものを見繕って進ぜよう。

でも、開いているお店がないんですけど。

うーん、そうだねえ。

クリスマス礼拝に、美沙ちゃんと二人で連弾させてもらうことにしたから、それだけでもいいよ。

えー、せっかく銀座まで来たんだから、もうちょっと探してみよう？

良枝ちゃん、ありがとう。

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝

川本綾子

増田良枝	うーん、残念だなあ。せっかく学校でみんなにあえるからさ。何かみんなにも買っていきかけたのになあ。
川本綾子	じゃあ、お芋を蒸かして持っていこうか？
増田良枝	いいねえ、それ！腹ぺこだからねえ。
川本綾子	といっても、配給で回ってくる以外はないか。
増田良枝	へへー、うちの患者さんがお芋を診察代わりに置いてったんだ。
川本綾子	どのくらい？
増田良枝	麻袋にいっぱい！
川本綾子	すごい！
増田良枝	二六日のクリスマス礼拝に、大きいやつ六本、蒸かして持っていってあげる。
川本綾子	ありがとう！
増田良枝	あー、やっぱり、花より団子、だねえ。
川本綾子	そうだね。
増田良枝	夜組に会うの久しぶりだねえ。ねえねえ、会ったらさ、久しぶりにあれ、やろうよ。
川本綾子	あれって？
増田良枝	川本班、総員六名、欠席0名、番号！ー！って。
川本綾子	夜勤が始まってからやってなかったねえ。
増田良枝	1、2、3でおしまいじゃあね。
川本綾子	よし、じゃあ、みんなが集まったらやろう。
	空襲警報。

増田良枝

え、どうして？

川本綾子

待避壕たいひごうはどこ？

増田良枝

こっち！

二人、走って行く。

川本綾子

すみません！入れて下さい！

はじき出される二人。あわてて他の待避壕を探す。

増田良枝

綾ちゃん、あっち！

川本綾子

待って！

増田良枝

急いで！

二人の間が開く。

増田良枝

(空を見上げ) B29が……。

川本綾子

良枝ちゃん！

爆弾の投下音。衝撃音！頭を抱えてうずくまる川本。暗転。川本綾子だけにスポット。

川本綾子

(うずくまった姿勢からゆっくり立ち上がる) それは、中島飛行場を第一攻撃目標として飛び立った敵機だった

と言います。視界不良のため、飛行場爆撃を断念したB29は、帰りがけに銀座に爆弾を落としていったのです。

軍の施設が狙われると聞いていたのに、まさか銀座に爆弾を落としていくなんて……。気がつくとは私のがれきの

山の中に埋もれていました。助け出された私が見たのは、変わり果てた銀座の様子でした。道に大きな穴が空ぎ、

何人もの人が爆風に吹き飛ばされ、転がっていました。良枝ちゃんも、そんな中にいたと言います。

背後から、保坂鞠子、川本綾子の肩を優しく抱きしめる。だんだん明るくなる。

保坂鞠子

主よ、あなたの御心は私たちにはわかりません。「主は与え、主は取られる。主のなすことはほむべきかな。」

どうぞ、増田良枝さんの魂をあなたのみもとでやすらわせたまえ。

川本綾子

先生。沢山の人が亡くなりました。

保坂鞠子

ええ。

川本綾子

……先生？

保坂鞠子

ここにいますよ。

川本綾子

私、涙が出ませんでした。

保坂鞠子

……涙が。

川本綾子

私、冷たい人間なのかな。

保坂鞠子

……祈りましょう。

霜山美沙子

霜山美沙子、曾野和歌子、北野美緒子、白井路津子が駆け込んでくる。

川本綾子

綾ちゃん、ごめんね。私のために。（涙ぐむ）

曾野和歌子

美沙ちゃん。……みんな。どうして？夜勤は？

川本綾子

クリスマス礼拝だから、休みをもらったのよ。

北野美緒子

そうか、クリスマス礼拝に来たんだね。……美緒子さん。

川本綾子

なに？

北野美緒子

少しだけ、美緒子さんの悲しさ、わかるようになったかもしれない。

川本綾子

綾子さん！

北野美緒子

むせび泣く六人。

霜山美沙子	私、疎開するの少し待ってもらおうことにしたよ。
川本綾子	美沙ちゃん？
霜山美沙子	もう一度、綾ちゃんとピアノを弾いてからにする。
川本綾子	(急に取り乱す) ピアノなんて、弾けない！
保坂鞠子	綾子さん！(強く抱きしめる)
川本綾子	良枝ちゃんが、急いでって言ったのに、私が遅れて、だから良枝ちゃん立ち止まって、それで……。
霜山美沙子	綾ちゃん。自分を責めないで。
北野美緒子	そうだよ……。
川本綾子	みんなに、大きなサツマイモ蒸かして持ってきてくれるって。みんなに会うの楽しみにしていたのに。……ごめんさい。みんなつらいよね。私だけが不幸じゃないよね。
保坂鞠子	みんなで増田さんのために祈りましょう。
保坂鞠子	お祈りの姿勢をする六人。
五人	主よ、どうか若い魂の受けた痛みを、いやしたまえ。御心ならばこの苦しみにあってもなおも雄々しく人を愛せしめたまえ。愛の力で全ての悲しみを覆い尽くす汝のみわざを表したまえ。救い主イエスキリストの御名によって祈りまつる。アーメン。
川本綾子	アーメン。
保坂鞠子	先生。
川本綾子	なあに。
川本綾子	頭の中が騒音でいっぱいなんです。

保坂鞠子	騒音で？
川本綾子	フォルテシモで、ガンガン頭の中で鳴り響いていて。こんな調子じゃ、ピアノを弾くなんて、とても無理です。
保坂鞠子	今は無理をしないで。
川本綾子	今も、これからも、無理です……。
保坂鞠子	がっくりとうなだれる川本。保坂はしばらくその様子を伺ってから、霜山に近づく。
霜山美沙子	霜山さん。
保坂鞠子	はい。
保坂鞠子	もし、急いで疎開しなくていいのなら、二月十一日まで待てないかしら。
霜山美沙子	紀元節、ですか。
保坂鞠子	ええ。来年も記念式の後に音楽会が予定されているの。そこで二人が演奏しては？
霜山美沙子	……父と相談してみます。
保坂鞠子	ありがとうございます。
佐藤カヨ	5 上手と下手に夜組、昼組が別れて働いている。真ん中に佐藤カヨ、足を引きずりながら出てくる。 作業終了！
白井路津子	佐藤、ゆっくりと退場。昼組、上手へ退場。夜組、下手へ退場。間。下手から夜組の三人が出てくる。舞台中央へ。上手から昼組の二人がやってくる。 おはよう、川本さん、霜山さん！

川本綾子

路津子さん！和歌子さん、美緒子さん！

三人

久しぶり！

霜山美沙子

こんな時間に、どうしたの？

曾野和歌子

実は今日の音楽会なんだけど。

白井路津子

一年生だけで挙行するって。

北野美緒子

それで、二人が落ち込んでるんじゃないかってね。

霜山美沙子

わざわざありがとう。

川本綾子

ありがとう。

曾野和歌子

私たち友達でしょ。川本班六人組、てね。

川本綾子

うん。

霜山美沙子

そうだね。

白井路津子

それだけじゃないんだ。

北野美緒子

そう！

曾野和歌子

佐藤さんに頼んで、今日、私たち昼組に入れてもらったんだ。

北野美緒子

保坂先生にも連絡して、二人の出演は許可をいただきました。

白井路津子

だから、二人は音楽会に出て。ピアノを弾いて。

佐藤

佐藤、袖に出てくる。三人、佐藤を囲んで最敬礼をしている。

三人

ったく、今回だからね。

三人

ありがとうございます！

佐藤	その代わり、夜勤もきっちり働くんだよ。
三人	はい！
保坂鞠子	佐藤退場。保坂鞠子が出てくる。
保坂鞠子	無茶です。
白井路津子	霜山さんに、紀元節まで疎開を待つようにおっしゃったのは先生です。
保坂鞠子	それはそうですが……。
白井路津子	お願いします！
保坂鞠子	三人、最敬礼。
三人	……わかりました。その代わり、無理はしないでね。
川本綾子	はい！
曾野和歌子	そんな、昨日も夜勤で、今日も昼も夜もなんて先生の言う通り無茶だよ！
北野美緒子	何の何の、私体力には自信があるから。
白井路津子	今こそ、女子聖乙女の底力を見せてやるってね。
曾野和歌子	「決死敢闘」の精神であります！
白井路津子	三人笑う。涙ぐむ川本、霜山。
曾野和歌子	思いつきり弾いて。
北野美緒子	心で聴いているから。
白井路津子	楽しんできて。
川本・霜山	ありがとう。

霜山美沙子

夜組退場。二人、並んで座る。音楽会の出番を待っている。

いよいよだね。

川本綾子

ぶっつけ本番になっちゃったけど、大丈夫かな。

霜山美沙子

大丈夫。（手を鍵盤に置く仕草）

川本綾子

……うん。（同じように見えない鍵盤に手を置く）

（二人の頭の中にピアノのメロディが流れ始める）

空襲警報。

保坂鞠子

（駆け込んでくる）警戒警報発令！音楽会は中止！全員帰宅！

顔を見合わせる二人。急いで下手へ退場。

汽車の汽笛。

下手から霜山、曾野、北野、白井、川本が出てくる。川本は手に大きめの封筒を持っている。

曾野和歌子

甲府へ行っても元気だね。

霜山美沙子

みんなも元気で。あ、でも和歌子さんは心配ないかな。

北野美緒子

どうして？

霜山美沙子

体力には自信あるんでしょう。

曾野和歌子

まあね。

白井路津子

学校で待ってるから。

北野美緒子

私たちのこと、忘れないでね。

霜山美沙子

もちろん！

曾野和歌子

それじゃあ、私たちはこれで。夜勤があるから。

曾野和歌子

お互いに小さく手を振る。曾野和歌子、みんなの後ろでもじもじしている川本綾子を前に押し出す。  
ほら！

霜山美沙子

綾ちゃん？

川本綾子

美沙ちゃん、これ。（封筒を差し出す）

霜山美沙子

なに、これ？

川本綾子

私が書いた曲なんだけど……。

霜山美沙子

え？（封筒の中を見る。手書きの楽譜が入っている）

川本綾子

連弾曲にしたの。また一緒にピアノ弾こうね。絶対。

霜山美沙子

うん！ありがとう！（川本綾子と抱き合う）じゃあ。

霜山美沙子

霜山美沙子、激しく手を振り、退場していく。立ち尽くす川本綾子。振り返り霜山美沙子の去った方を見つめる

霜山美沙子

川本綾子。退場。

霜山美沙子

下手から夜組の三人がでてくる。作業をしている。曾野和歌子、咳をしている。

霜山美沙子

和歌子さん、大丈夫。

曾野和歌子

大丈夫、大丈夫。

曾野和歌子

ひどい鼻声。顔も赤いし。

曾野和歌子

体力には自信があるの。

曾野和歌子

北野、曾野の額に手を当てる。

北野美緒子

熱、あるよ。医務室へ行ってきたら。

曾野和歌子

このくらい大丈夫だって。

北野美緒子

無理しないで。

曾野和歌子

今、無理をしないで、いつするの？空襲がいつ来るかわかんないし。

北野美緒子

北野と白井、顔を見合わせる。作業を再開する。

北野美緒子

今夜は警報出ないのかな。

白井路津子

この所、多いからね。

北野美緒子

ここも狙われるのかな？

曾野和歌子

手元の明かりだけでやってるから、上からは見えないよ。多分。

北野美緒子

ねえ、私たちが作ってるこれなんだけどね。

白井路津子

何？

北野美緒子

聞いた話なんだけど、高射砲の部品らしいよ。

白井路津子

高射砲の？

北野美緒子

そう。本土防衛のための軍事機密だから、言っちゃだめだよ。

曾野和歌子

B29には届かないけどね。

白井路津子

曾野、激しく咳き込む。

曾野和歌子

大丈夫？

白井路津子

ちょっと寒気がする……。

曾野和歌子

ストーブのところでちょっと暖まったら……。  
いいよいよよ。(手がかじかむ。)

白井路津子

手を温めるだけでも。

白井、曾野を抱きかかえて、少し離れたストーブまで連れて行く。ストーブに手をかざす曾野。

佐藤、下手袖から顔を出す。

佐藤カヨ

何やってんだ！

佐藤カヨ、バケツを持って出てくる。

佐藤カヨ

マジメにやんな！（ストーブに水をかける）

三人

ああ！

がたがたと震える三人。

白井路津子

……そんなに私たちのことが嫌いですか。

佐藤カヨ

……ああ。

白井、かっとなって佐藤につかみかかろうとする。そこに保坂鞠子が飛び込んでくる。白井を止める。

保坂鞠子

路津子さん！

白井路津子

先生、止めないで下さい。

保坂鞠子

いいえ、いけません。これは、私のつとめです。

白井路津子

え？

保坂鞠子

（つかつかと佐藤の元に詰め寄り）生徒たちはただお国のためと、仕事をしているんです。少しくらい熱があっても、学業をなげうってきているのに、この寒中、ストーブを消してしまうのはあんまりじゃないですか！今回のことは、佐々木工場長に報告させていただきます。

佐藤カヨ

わかったよ。つけりゃいいんだろ！

佐藤、渋々ストーブを点火する。佐藤退場。保坂鞠子退場。

夜組の三人、黙々と作業を続ける。

佐藤  
作業終了！（引っ込む）

6

上手の川本綾子、懐から手紙を取り出し、広げる。下手に霜山美沙子が登場。

霜山美沙子  
綾ちゃん、お元気ですか。夜組のみんなはどうしていますか。甲府での生活もやっと落ち着きました。こっちは

寒いけれど、雪はそんなに降りません。こちらの女学校に編入しました。私のように東京から疎開してきた人が

四十人くらいいます。綾ちゃんのくれた曲を早く弾きたいのですが、残念ながら、ここでもピアノは弾けません。

夜は星がきれいです。何より静かです。ピアノシモの世界かな。でも、みんながいなのは寂しい。綾ちゃん

もこちらに来てくれたらと思います。

またお便りします。

昭和二十年三月三日 霜山美沙子（霜山美沙子、退場）

川本、手紙をしまう。下手側に歩いてくると、三人が待っている。曾野は咳をしている。

曾野和歌子  
（咳を我慢しつつ）班長、おつかれさま！

川本綾子  
みんな！

北野美緒子  
お久しぶり。

白井路津子  
元気？

川本綾子  
どうしたの、三人して。

曾野和歌子

今日は、いいお知らせを持ってきました。(ひどく咳き込む)

川本綾子

和歌子さん、大丈夫？

曾野和歌子

大丈夫、大丈夫。……はい、じゃあ、いいお知らせを白井さん。

白井路津子

はい。えー、こほん。

川本綾子

何？もったいぶらないで。

白井路津子

今度の日曜日、教会に来ませんか？

川本綾子

路津子さんの家に？

白井路津子

そう、深川だから、ちょっと遠いけど。実はグランドピアノがあるの。

川本綾子

グランドピアノが！

白井路津子

礼拝の後なら弾いてもかまわないって父が。

川本綾子

ありがとう！わー、うれしいな！ピアノに触れるの、いつ以来だろう。

白井路津子

よかった。川本さんの笑顔、久しぶりに見た。

川本綾子

そうかな？

白井路津子

うん。

川本綾子

学校に帰りたかって、毎日毎日そればかり考えてたからかな。

白井路津子

私もだよ。

川本綾子

今年の校庭の桜、見られるかな。……緑なす風にそよぐ 桜よ楓よ銀杏よ……

四人

(そっと) うるわし我らの学び舎 幸あれ 女子聖学院(笑い声)

白井路津子

私の名前、路津子ってね。

川本綾子	うん。
白井路津子	聖書から取った名前なの。今はつらくても、いつかきつと幸せな時がやってくる。そういう願いがこめられた名前なの。
川本綾子	いい名前だね。
白井路津子	父も、みんなに会えるのを楽しみにしているから。
川本綾子	…みんなも来てくれるの？
曾野・北野	もちろん！
川本綾子	いつ行ったらいい？
白井路津子	午前十時に。礼拝から出てね。
川本綾子	ええ！日曜日というと…。
白井路津子	三月十一日。
曾野和歌子	班長のピアノ、聞きたいなあ。
北野美緒子	校歌も弾いてね。
川本綾子	任せて！あ、でも、また空襲が…。陸軍記念日の十日を狙って、攻撃があるかもしれないって…。
白井路津子	そんなのうわさだよ。あってもどうせ夜でしょう。深川の夜はB29から見ると海の続きに見えるんだって。だから、うちの方は大丈夫だよ。
曾野和歌子	班長のうちの方こそ大丈夫？学校もだけど、丘の上の方が目立つんじゃない。
川本綾子	警報がなったら、防空壕に飛び込みじゃおう。
北野美緒子	ピアノを弾く絶好の機会だからね。

川本綾子	みんなわざわざありがとう。夜勤、頑張ってるね。
白井路津子	うん。さようなら。
曾野和歌子	じゃあね。
北野美緒子	さようなら。
川本綾子	さようなら。
	川本綾子下手に去る。見送る三人。咳き込む曾野和歌子。背中をさする白井。心配そうに覗き込む北野美緒子。
	三人上手へ退場。
	SE「爆音」入る。上手袖に霜山美沙子登場。
霜山美沙子	三月九日の夜から一〇日にかけて、東京に大空襲があったことを、私はラジオで知りました。ものすごく風が強い夜でした。外に出て見ると、東の空、東京の方が真っ赤です。禍々しいほどの炎の色。神様、どうかみんなを守って下さい！
	SE「空襲警報」入る。ホリゾントに空襲で空を焦がす炎の色。シルエットで上手から三人が走り出てくる。下に北野美緒子、真ん中に曾野和歌子、上手に白井。曾野和歌子は横たわる。白井は手にバケツを下げている。
	白井に照明。
白井路津子	父さん、チャペルに焼夷弾が！（バケツで水をかけるマイム）だって、ピアノが！
曾野和歌子	（照明）ひどく咳き込む。弱々しく）……大丈夫、体力には自信が、あるから……。 （立ち上がるうとして倒れる）
北野美緒子	（照明）あれ、おかしいなあ、立てないよ。母さん、逃げて。 （這いながら前へ出てくる）
北野美緒子	（照明）お母さん、もう裏にも火が！早く、あっちへ！
三人	（照明）いやあっ！（ストップモーション）

ラジオ	<p>「大本営発表</p> <p>本三月十日零時過ぎより二時四十分の間B29約百三十機主力をもって帝都に来襲市街地を盲爆せり。右盲爆により都内各所に火災を生じたるも宮内省主馬寮は二時三十五分その他は八時頃までに鎮火せり。」</p> <p>大本営の発表は素っ気ないほどに簡単でした。でも私が知りたかったのは、川本班のみんなの安否だったんです！</p> <p>一体みんなはどうしているのか。私は、ただ毎日祈っていました。</p> <p>下手に川本綾子が現れる。霜山、川本からの手紙を読んでいる。</p>
川本綾子	<p>「美沙ちゃん、お手紙ありがとう。御返事が遅れてごめんなさい。ご心配をおかけしました。</p> <p>美沙ちゃんが元気でいてくれること、それが今の私の心の支えです。</p> <p>辛く、悲しいお知らせをしないでいけません。どうか、心を落ち着けて読んで下さい。</p> <p>三月十日の大空襲で、曾野和歌子さん、北野美緒子さん、白井路津子さんが亡くなりました。あんなに元気な三人が、もうどこにもいないなんて、とても信じられないでしょう。」</p>
曾野和歌子	<p>三人、並んで登場。回想シーン。</p>
北野美緒子	<p>何の何の、私体力には自信があるから。</p>
白井路津子	<p>今こそ、女子聖乙女の底力を見せてやるってね。</p>
曾野和歌子	<p>「決死敢闘」の精神であります！</p>
北野美緒子	<p>三人笑う。</p> <p>思いつきり弾いて。(笑顔で手を振り、去る)</p> <p>心で聴いているから。(笑顔。去る)</p>

白井路津子

楽しんできて。(笑顔。去る)

川本綾子

「焼け残った家から、焼け残った工場に行って、それでも私は働きました。ただただ、学校が恋しく、みんなが恋しかった。でも、一つだけ嬉しいことがありました。学校の体育館を利用して、乾電池工場が造られ、私たちが四年生から一年生まで全員が学校工場で勤労働員されることになったんです。それだけに、みんながいなかったがさらに強く感じられます。ピアノも、工場の邪魔になると倉庫に片付けられてしまいました。

いつまた学校が空襲されてもおかしくありません。だから、もしかしたらこれが最後のお手紙になるかもしれません。

美沙ちゃんだけでも、どうかお元気で。

昭和二十年五月三十日 川本綾子

7 川本、霜山の手紙を読んでいる。

綾ちゃん、お手紙ありがとう。

和歌子さん、美緒子さん、路津子さんのことを思って泣きました。綾ちゃんも最後のお手紙なんて言わないで、どうかまた手紙をよこして下さい。

こちらも生活は大変です。でも、日本が勝つまで、我慢です。

綾ちゃん、離れていても、心は一つです。毎朝、女子聖学院のみんなのためにお祈りします。もうすぐ七夕ですね。みんなの無事を短冊に書いて飾ります。

昭和二十年七月五日 霜山美沙子

霜山美沙子

保坂鞠子	竹の葉に短冊を結びつける美沙子。手に持っていた楽譜を落とす。美沙子ストップモーション。 甲府への空襲で、霜山さんが！
保坂鞠子	空襲警報。崩れ落ちる川本綾子。空襲の中逃げ惑う霜山。
玉音放送	暗転 茲ニ 忠良ナル爾臣民ニ告ク 朕ハ 帝國政府ヲシテ 米英支蘇 四國ニ對シ 其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨 通告セシメタリ
川本綾子	明るくなると、保坂鞠子が誰かを探している。川本綾子がスカート姿でやってくる。保坂、川本を見つけ、近づく。
保坂鞠子	川本さん……！
川本綾子	私、ひとりぼっちになってしまいました。
保坂鞠子	九月になれば、みんな戻ってくるそつですよ。学校もにぎやかさを取り戻すでしょう。あなたは一人ではありません。
川本綾子	……はい。
保坂鞠子	校庭も殺風景になってしまいましたね。でも、いつか、みんなが笑っておしゃべりができる場所に戻していきましょう。ところで、川本さん、あなたは進路はどうしますか。
川本綾子	まだ心の整理がついていませんが、許されるなら、上級学校へ進学したいと思っています。
保坂鞠子	けっこうです。今までの遅れを取り戻すようにしっかり勉強しましょう。
川本綾子	はい。よろしくお願いします。先生、学校の中を見て回ってもいいですか。
保坂鞠子	どうぞ。それじゃ。

川本綾子	失礼します。
	保坂鞠子、退場。一人になって周りを見回す川本。ポケットから一枚の写真を取り出す。六人で撮った思い出の 写真。
	亡くなった生徒たちが現れる。
霜山美沙子	綾ちゃん。
川本綾子	美沙ちゃん！
霜山美沙子	私、疎開するの少し待つてもらおうことにしたよ。
川本綾子	美沙ちゃん、もう一緒にピアノ弾けなくなっちゃったね。
曾野和歌子	班長のピアノ、聞きたいな。
川本綾子	和歌子さん。
北野美緒子	心で聴いているから。
川本綾子	美緒子さん。
白井路津子	楽しんできて。
川本綾子	路津子さん。
増田良枝	ねえねえ、久しぶりにあれ、やろうよ。
川本綾子	良枝ちゃん！
増田良枝	川本班、総員六名、欠席0名、番号！ー！って。
川本綾子	うん！整列！川本班、総員六名、欠席0名、番号！ー！
霜山美沙子	2！

曾野和歌子	3!
北野美緒子	4!
増田良枝	5!
白井路津子	6!
曾野和歌子	作業開始!
五人	集まると、グランドピアノが現れる。招かれる川本綾子。 弾いて。心で聴いているから。 川本綾子、椅子に腰掛ける。優しく見つめる五人。目を閉じて深呼吸をすると、ピアノを弾き始める。 かぐわしき花の香り 園に満ちて 爽やかなる青葉の色 岡にあふる みどりなす風にそよぐ 桜よ楓よ銀杏よ うるわし我らの学び舎 幸あれ 女子聖学院 笑い合う生徒たち。
	一幕
	参考文献
	『戦争中の暮らしの記録』暮らしの手帖編
	『女子聖学院50年史』